

キャンパスを歩き、街を訪ねる。

農学部正門の右手に建つガラス張りの気品あふれる記念館、弥生講堂。明治から続く名門幼稚園、文京区立第一幼稚園。それぞれ元学部長と園長先生に話を聞く。



農学部設立125周年の記念事業の一環として建てられた弥生講堂。そのたたずまいの中に人・生物・環境を思いやる農学の心が息づく。

一条ホール天井に渡された20メートルの梁

時をかけて美しくなる記念館。

弥生講堂

ガラスの扉を押して中に入ると、そこには樹の生命の息づく静寂がある。つややかな柱とフロアリング。向かいにはレッドウッドのテラス。会議室、展示スペース、中二階と、そのすべてに洗練さが漂うが、圧巻は東の空間を多角形に切り取った一条ホールだ。

その名は講堂建設に多額の寄付を投じた一条工務店に因んだ。天井には20メートルある梁が渡され、不思議な幾何学模様を描く。この集成材には岩手県遠野の70年もののベニカラマツが使われ、落成式では村の人たちが、大勢の招待客を前に、祝いの舞いを披露した。

ない独自工法を考案し、遺跡を残すかたちで建設計画を進めた。

設計は農学部の安藤直人教授が香山壽夫先生(建築家・東京大学名誉教授)を代表とする設計事務所、および施工にあたった一条工務店の技術者らと協力して任にあたった。「環境に優しく100年経っても倒れない木造建物」という基本思想のもと丁寧に作り上げ、2002年の日本建築学会作品選奨に輝いた。

「この柱は時が経つにつれてもっと深みを帯びてきますよ。色合いを増してきた木肌を指しながら林教授は話す。「工学系のものづくりが『making(製作)』であるのに対し、農学のものづくりは『growing(育成)』。時をかけて美しくなるのは当然です」。樹の息吹に包まれながら、小林教授も静かに語り始める。「人間が学問を創るというけれど、本当はそうじゃない。学問が人間を創る。農学は優しい人間を創ります。農学を研究する先生や学生はみんな優しい、良い人たちですよ」。

中庭に目をやると、片隅に旧正門の扉がひっそりと佇んでいる。木の生きる長い時間を思いながら「優しい人間」を創る学問について、もっと聞いてみたくなった。



心和フロアリングと柱。



第38代農学部長
はやしよしひろ
林良博教授

第37代農学部長
こばやしまさひこ
小林正彦教授

竣工は2000年。農学部125周年の記念建築だ。設立に骨を折ったのは、前後して農学部長を務めた小林正彦教授と林良博教授。小林教授は竣工前の準備、林教授は着工後の式典・運営などに奔走した。

準備段階で、講堂の建設用地に遺跡問題が持ち上がった。本格的な調査をすれば7000万円。あえて違反をすれば罰金30万円。さて、どうする? 結局、地面を50センチ以下しか掘ら